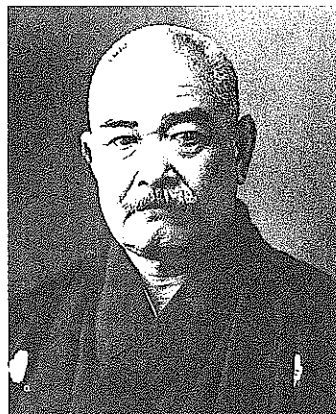


五 磯貝 一 ～我が道を歩み続けて～



日本の柔道界で、十段という最高の段位を取得した磯貝 一は、明治四年（一八七一年）に、延岡市船倉町ふなくらまちに生まれました。

磯貝は体が弱かったため、幼いころから祖母や父に鍛えられて育ちました。その一つとして、十二歳になると、近くにすむ鈴木千右衛門すずきせんえもんに柔術の指導を受けるようになりました。

学校を卒業すると、磯貝は海軍を志して上京し、働きながら塾に通って一生懸命勉強をしました。そして海軍兵学校を三回受験しましたが、いずれも不合格の通知ばかりでした。磯貝にとって思い悩む日々が続きました。磯貝を知る周囲の人々は、磯貝が懸命な姿で勉学に取り組んでいたため、失望のあまり、自暴自棄になるのでは……と心配するほどだったのです。

そんなある日、いつもの道を歩いていた磯貝は、通い慣れた塾のすぐ隣にある講道館こうどうかんの前で足を止めました。





磯貝は若いころに柔術を教わっていたこともあって、以前にも練習をのぞいては、自分も飛び込んでやってみたいなあとすることが何度かありました。しかし、この時ほど柔術に対する情熱を抱いたことはありませんでした。「そうだ、ふるさとの延岡で教えを受けた柔術なら、今の自分を生かせるかもしれない。」と講道館への入門を心に決めたのでした。

入門してからの磯貝は、体力づくりを自主的に行い、体力や腕力に自信をつけていきました。さらに、柔道についての関心も高かったので、その進歩・上達は他の人よりもすぐれていました。しかし、このころの磯貝は習った技を鍛えた腕力にまかせて使い、相手が無茶苦茶に投げ飛ばして、自分が一番強いのだと思っていました。

そのうち、師範の嘉納先生に稽古をつけてもらえるチャンスがやってきました。嘉納先生は、熊本の学校の校長をされており、休みを利用して帰郷されたのでした。磯貝は、「仕事の忙しい嘉納先生は練習も不十分であろう。それに比べ自分は、練習もかなり積んでいる。簡単に負けるわけはないだろう。」と書いていました。

ところが、先生と組んだ瞬間、磯貝は、立つことも起きあがることもできないほど投げられてしまったのです。

この時、磯貝は、「体を鍛えるためにあれほど稽古を積んできたのにその技すら先生には全く通じなかった。なぜなのだろう。」と考え続けました。

それからの磯貝は、過酷と思われるほど心身ともに自分自身を鍛え始めたのです。誰よりも早く道場に姿を現し、ひたすら稽古に打ち込みました。そして、仲間よりも遅く道場から帰っていったといひます。また、柔道の技では、特に寝技ねわざの稽古を重ねていきました。

しばらくして磯貝は、嘉納先生と再び試合をすることになりました。

「どうだ、私を押しえてみないか。」と先生に誘われました。先生の腰に腫れ物はができて知っていることを知っていた磯貝は、「大丈夫ですか。」と聞き返しました。

「そうだなあー、それじゃ左から押しえてみる。」と先生は、畳の上に仰向けに寝て構えました。磯貝は、袈裟けさがた固めに押しえ込み、試合が開始されました。力と技、そして気迫とも互いに譲らず、一進一退を繰り返していきました。

二人のろつ骨がギリギリとねじれ合う音がしたと思つた瞬間、ボキボキツと鈍い音を立てて磯貝のろつ骨が折れてしまいました。磯貝の胸には刺すような激しい痛みが走りましたが、磯貝はそれを言葉にしませんでした。先生は、「痛むか。」とたずねられました。磯貝は、「はい、骨が折れたようです。」と答えただけで、先生の前では顔色一つ変えようとはしませんでした。

磯貝のけがは、ろつ骨を三本折る重症でした。しかし、この試合のあと磯貝は、講道館分場長の仕事及び高等学校の武道教授として、京都に行くことになっていました。普通なら、安静にして治療をするところですが、磯貝は練習を三日ほど休み、傷の腫れと痛みをやわらげるために、幼いころ祖母から教えられた水垢離みずずりをするだけでした。そのため晩年になつても、折れたろつ骨の傷跡は、ふくれあがつたままになっていました。

そののち磯貝は、三十三歳の若さで六段に進み、柔道教師として各学校で指導にあたるようになりました。

教える立場となっても、柔道そのものも強く、そのうえ人間として優れていなければ学生に教える資格はないと考え、自分自身の鍛練たんれんを決して怠りませんでした。

そして、柔道界においても、今まで各流派でまちまちだった柔道の形を統一しよう为中心となって努力しました。磯貝はそれから、自らの練習に励み、柔道の普及に努めながら、ついにわが国の柔道界の最高段位である十段となったのです。

それは、昭和十二年磯貝一が六十七歳の時でした。